

美酒ラン掌説

作 福田章
イラスト 溝淵可央梨

スローな酒場へ



トラベルライターの河豚丸が、下関駅から乗ったタクシートの運転手に告げる。

「たぶん岬之町はなのちまうというあたりです。左右に大きなガソリンスタンドがあって、手前を左に入って奥の方に向かったところだそうですね。下関でも格別に安いホテルで、携帯電話がつかまらない部屋なら三千六百円とかなんとか」

「ああ、あのへんはさんびやくめ「三百目」っていうんですよ」

「三百目？」

「その名前のバス停がありますよ」

「三百目かあ。それを知ったが百年目という感じですね」

「ここでしょう？」

河豚丸は携帯のつながらない部屋を予約していた。仕事で来ているのにそうしてしまうのは、旅先の宿はほんの短時間寝れさえすればよくて、節約したお金を飲食に使った方がましだと考える、エンゲル係数の高いライターだからである。特に今回は、とある旅行雑誌から、この街のユニークな酒場を探して、覆面取材というか、自由に飲食してレポートせよという依頼を受けていた。

さっそく荷物をベッドに放り出し、カメ